

第10回「日本語大賞」

テーマ「忘れられない言葉」

中学生の部 文部科学大臣賞 受賞作品

「“私”で生きていく」

東京都
南多摩中等教育学校
1年 野口 夏葉

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

このままでいいのか。

入学してからある程度の時間が経って人間関係が確立しつつある今、そう考える瞬間がふとした時にやって来るようになった。このままでいいのか、自分を疑い出したのは七月になつてからだ。私はその迷いをそのままにして、中学生になつて初めての夏休みを迎えた。

その日、目が覚めると部屋がムンと暑かった。汗で首のあたりにはりついた髪を払い、今日の午前中は部活があることを思い出す。それから制服に着替え、一階に下りた。

洗面台の前に立つと、まだ眠い顔の私が鏡に映っていた。前髪が寝ぐせのせいで盛大に右側に片寄っている。それを直しながら、私は視線を少し下に落とした。

そこには、首から下がるだらしなく緩んだリボンがあった。

「何でリボン、そんなキツくしてんの？」

「え？ リボンってこういう物じゃないの？」

「もっと緩くすればいいじゃん。暑いし、苦しくない？」

私がリボンを緩くしたきつかけは、こんな友人とのささいなやりとりだった。シャツの襟がある時点でリボンがあるうがなかるうが、あまり変わらないような気もしたが、何となくそれからはリボンを緩くだらしなくするようになっていた。

もう一度、鏡の中の自分と目を合わせてからリボンに目をやる。

何かがチクツと胸の中で疼いた。

結局、私はそのまま家を出た。外は抜けるような八月の青空が広がっている――。

夕方、私は疲れてリビングのソファの上でぼうつとしていた。というよりも、最近感じる「このままでいいのか」について、また考えていた。

「ねえ、母ちゃん。私さあ、やっぱり自分のこと見失ってる気がするんだよね。」

台所に立つ母にそう呼びかける。

「ええ？ ごめん、今水使ってるから聞こえないんだけど。」

「だからあ、自分を見失ってる気がするんだけど。」

母は包丁を握り、野菜を切り出した。まな板に包丁が当たる規則的な音が部屋の中に響く。

「何？ また何か、他人に引っ張られてるって感じることもあったの？」

「そういうわけじゃないんだけどさあ……。小学生の時は自分がありすぎて、逆に直した方がいいんじゃないかぐらいに思ってたのに、今はさあ……。」

ふと、今朝のリボンのことを思い出した。あれも中学入学してからのことだな、と思うと改めて環境や他人に流されていることを感じた。今までになく、強く。

人の顔色を窺いながら行動していることが悔しい。判断さえも他人ひとに流され、相手の方の流れが強ければたとえ悪事であったとしても軽く首を縦に振ってしまう。今の私はそんな人間になつていた。

頭の芯がチリチリと火花を散らし出したその時だった。

「“私”で生きていくこと。」

その言葉が、私の中で散る火花を一瞬にしてしずめた。

私の好きな、松任谷由実さんがベストアルバムのメッセージの冒頭で綴った言葉。

暗く渦を巻いていた思いがすーっと引いていくのが分かった。ごちゃごちゃとしていたものが整理されていく、そんな気がした。

私は、テーブルの上のCDケースを手にとった。カパッと音がして、フタが開く。そして、歌詞が書いてある小さな冊子の表紙をめくった。

「“私”で生きていくこと。」

オレンジ色の、手書き文字。

それは、私がこれからどうするのがいいのかを確かなものにしてきてくれた。

私は冊子をCDケースの上に静かに置き、代わりにテーブルの隅にあった制服のリボンを手にした。そして、首にかかる紐の部分をしっかりと自分の首に合うように短く調整する。

小さい事でも、自分の信じた選択をしたい。確かに、時には誰かの話に合わせることも大切な事だが、他人のために自分を捨てる必要はどこにもない。

もう、私がリボンを緩くしてつけることは絶対にならないだろう。

これからは“私”に従って“私”で生きていくのだから。